

アクティブラーニング最前線

見えてきた課題とその解決策

追跡！AL導入から1年、生徒はどう変わったのか？

アクティブラーニング

昨年、全校で組織的にアクティブラーニング導入を図った神奈川県立藤沢清流高校。そのスタート地点である、教員全員が受けた研修の様態を本誌No.47(2013年7月号)でも紹介しました。それからの同校はどう変わったのか。この1年の取り組みの軌跡と変化を取材しました。

取材／文／長島佳子 撮影／西山俊哉

生徒の能動性が目覚ましく高まった

藤沢清流高校(神奈川県・県立)

90分授業の充実を図り
3カ年計画で導入

藤沢清流高校がアクティブラーニング(以下AL)に取り組みだした背景は、現在同校で中心的にALを統括する一人である小島昭彦先生が、自分の授業のマンネリ化の悩みを前校長に相談したことに始まった。前校長は「変えるなら全面的に」と後押し。小

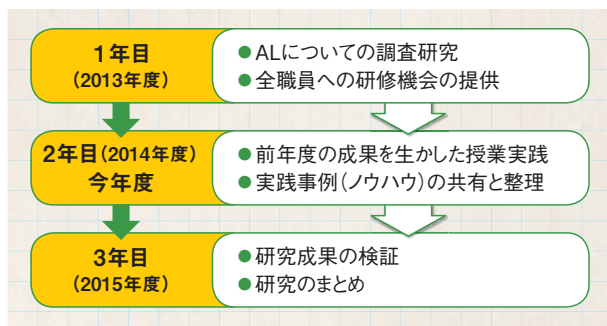
島先生は、「学力を着実に高める」と、「同校の特色である「90分授業」でいかに生徒に集中させるか」という従来からの課題を解決する授業を提起できれば、学校全体が変わるのではないかと考えた。

そして、教育連携先である産業能率大学の研修に参加するなどして、自校にマッチする方法を検討。「アクティブラーニングに基づく学力向上推

進」としてまとめ、神奈川県の研究推進校として採択され、3カ年計画で進めることとなった。(図1参照)

初年度の昨年は、情報収集と全教員に対する研修を行った。昨年5月には、元・埼玉県立越ヶ谷高校教諭の小林昭文先生(現・産業能率大学教授)を招いての「AL型授業を実践するための入門講座」が開かれ、その様子は本誌でも紹介した。12月には河合塾教育研究開発本部の成田秀夫氏による「社会で求められる力(ジェネリックスキル)とその測定、そしてアクティブラーニングによるジェネリック

図1：藤沢清流高校の「アクティブラーニングに基づく学力向上推進」3カ年計画





2010年創立／単位制による普通科／生徒数718人(男子349人・女子369人)／進路状況(2013年度実績)大学54.9%、短大12.8%、専門学校23.0%、就職0.9%、その他8.5%



総括教諭
キャリア支援グループ
小島昭彦先生(英語)



総括教諭
研究推進グループ
家村豊先生(国語)



▲本誌No.47より。同校の50人近い先生方が参加した小林先生の実践研修

「スキルの育成」をテーマに研修会を実施。いずれも、AL形式の実践的な研修で、先生たちが生徒側の立場でALを体験するとともに、教育現場における有用性を学んだ。

取り組みの2年目となった今年度は、授業での実践と並行して、教員向けには小島先生による講義や、教科を超えた分科会での座談会を5月に実施。また、教科会で実践事例の共有やノウハウの整理を行うなど、組織的にALを進化及び深化させている。

方法はさまざまでいい 目的は学校全体の変化

これまでの取り組みを振り返って
小島先生は、

「ALと言っても授業のやり方は教科や先生、また授業のテーマによってさまざまです。昨年のスタート当初に小林先生に研修をしていただいた際も、ハウツーを学んでもらうことよりも、参加した当校の先生方に、普段の授業もALになつていくことに気づいてほしかったのです。その気づきを分かち合うことで、さらなる気づきが生まれます。大事なのは、ALの理想の型を探すことではなく、方法はいろいろでよいので、学校全体で能動的な授業に取り組むことだと思います」

小島先生と共にALを統括している、研究推進グループの家村豊先生はこう語る。

「研究推進グループはAL専門の研究ではなく、普段の研究

業研究のコーディネートをする、もともとあった部門です。当校は従来から90分授業を行っており、飽きさせないために、教師側の引き出しを増やすことが常に求められていました。ですからALを学校全体で取り組むにしても、上からの押しつけではなく、

運動のように教員間にひろがっていくことが理想だと考えています」

独自の手法で取り組み 各先生が生徒の変化を実感

では実際に、同校の先生たちはどんな授業を行い、生徒の変化をどう感じているのだろうか。5人の先生の授業を取材した。

コミュニケーション英語Ⅰ(1年次) 小島昭彦先生

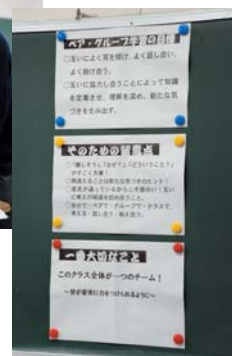
小島先生の授業は、毎回実施の単語テストに始まり、先生があらかじめ用意したその日の題材となる数枚のプリントを1枚ずつ配付し、グループごとに音読、全員で起立しての音読、内容をグループごとに確認(教え合い)、意見のとりまとめ、発表などをして進行していく。

先生の授業の特徴は、授業の初めに、毎回必ずALの意義(グループ学習の目標、留意点、大切なこと)を説明し、生徒に意識させたいうえで授業を行うこと。授業の最後には毎回振り返りで授業の感想を書かせている。「ALを意識させたいうえで授業をすると、生徒自身からも『教え合うことがよかった』という感想が出るのです。

▼黒板に毎回、ALの意義を書いた紙を貼って生徒の意識を喚起



▲全員起立しての音読。声を出さない生徒は一人もおらず、居眠り防止にも



ALのメリットを実感し、振り返りをする積み重ねによって、授業がよりにきいと感じていくように感じています」

国語総合(1年次) 家村豊先生

家村先生のこの日の授業は古典文法について。毎回の漢字テストで授業がスタート。先生が古文の用言活用のもとめを書いたプリントを配付し、基本文法について講義型で解説。その後グループに分かれて、用言の活用について先生から出された設問に関して、グループごとに話し合い、解答とその理由をホワイトボードに記入し



◀グループで書き下しをしている間、先生に自由に質問できる



◀演習のグループワークはホワイトボードを活用



▲各班の答えを一斉に共有するのにもホワイトボードは有効なツール

古典B(2年次)
浅野まり恵先生

浅野先生の授業も、小島先生、家村先生同様、毎回の小テストに始まり、この日のテーマの漢文作品について、隣や前後の席でのペアワークやグループワークで読み方や書き下しについて話し合ったり、教え合う形式で授業が進行。浅野先生は「ひとつの作業を、ストップウォッチで計って、終了時を決めたうえで生徒が考え、答えを出す時間を与えていた。」

発表する。グループ全員が理由を説明できるようにすることが目的だ。「生徒からは『先生の説明がわかりやすくなった』という感想が多くなりましたが、説明は以前と変えていないのです。説明する前に考える時間を設けているため、腑に落ちており、わかりやすくなったと感じているのだと思います」

現代社会(1年次)
鵜戸紘一郎先生

「A.L.を始める前は、生徒は漢文は嫌いなのだろうと思いついていたので、教え合ったり、説明させようとするればできるんだ、と気づきました。講義形式の授業のときは、当てた生徒の理解度しからず、生徒全員の手応えがわからなかったのですが、A.L.では、少しのヒントからペアやグループで、ああだこうだと言いつけているうちに段々と答えに近づいていくのが見えてわかります。そして『わかった』という瞬間の生徒の顔を見る機会が増えたことを実感しています」

鵜戸先生のこの日の授業は、経済成長と景気変動、物価のしくみについて。実際に世の中で起きている事例を用いて、経済動向についての講義の後、グループに分かれて「非正規雇用と景気の関係」について考え、グループで導き出した意見をホワイトボードにまとめる授業だ。

「グループワークの間は自分が巡回できるので、生徒が理解できているかを授業内で確認できます。A.L.を始めたばかりの昨年は話し合いが進まなかったり、時間内で終わらないことがあ



▲講義からグループワークへの転換も生徒たちはすぐに移動し無駄がない

つたため、今年は私から質問を投げかけて会話をはずみやすくしたり、時間を区切るように改善しました。生徒たちも『A.L.に慣れてきた』と言っていますが、それより教える側の自分が慣れてきたんだと思います。また、同じ社会科でも、現代社会は生徒が当事者意識をもちやすく生徒同士が議論しやすい科目ですが、歴史などはグループワークをするまでに前提知識が必要になるため、方法を変えなければいけないと感じています」

数学II(2年次)
森井昌邦先生

森井先生は図形を表す方程式の授業を行っていた。先生の基本解説の後、演習で黒板に書いた問題に対して、生徒が自由に考えを発言していく。1人の生徒の意見について、正しいか、違うのだろうか、次々に他の生徒の考えを聞いていく。別の問題では、わかった生徒とわからない生徒で席を移動させてグループを作り、解答の導き方をそれぞれに話し合っている。トボにまとめさせていた。

▼なぜその答えを出したか、アプローチはグループによって異なっていた



「数学は正解よりもアプローチが大事だと、以前から生徒たちには言っていました。A.L.グループワークというわけではないので、講義型でも生徒が声を出せたり、頭を動かす時間が重要です。こうした授業をしていると、『そういうことだったのか』と数学を怖がらなくなり、手取り足取りでなくても生徒が能動的にやるようになってきた。声に出せば、間違いなら仲間や私がそれを指摘できますし、合っていれば私もほめます。自分で考えて正解にたどり着いた生徒は本当にいい顔をします。A.L.を始めてからは回数が増えました。」



生徒たちの変化



横山直輝さん(1年生)

中学でも班学習は少しやっていたのですが、お互いに教え合うグループ学習は、教える立場になると自分の理解を整理することになるので、習ったことが身につくようになります。教えてもらうときも友達同士だと気軽に聞けます。間違っていたとしてもすぐに指摘されるので、間違っただけで理解することがないので、いい方法だと思います。ただ、理科の授業などは、今は化学式など暗記しなければならないことがたくさんあるので、考えるより暗記が必要な授業ではグループ学習でないほうがいいと感じています。



名越紗世さん(1年生)

授業中でも友達同士の会話が多くなるので、先生への質問もしやすいですし、授業内容が頭に入りやすいです。しゃべっていいと何より授業が楽しいですし、友達同士で「間違えちゃったねー」と言い合ったことが記憶に残っているので、同じ間違いは繰り返さなくなります。英語や国語のようなコミュニケーションが基本の授業はとてもALが楽しいですが、数学で計算を解くときにまわりのスピードについていけず、後から見直さなければならなかったときもあるので、そういう授業のときは自分だけの時間がほしいです。

生徒による授業評価(グループワークに関して)の記述より

- グループワークがたくさんあり、90分間集中して勉強できています。
- ペアワーク、グループワーク、フラッシュカードで責任感のようなものが出て、身につきます。
- 難しい問題をグループでやるのは、話し合いの力もつくし、自分が思いつかない考え方などができて、とてもいいと思います。
- 前後や左右の人と授業の内容を話すことで、それをまとめることができるので、わかりやすいです。



▲数学Iの吉澤将大先生の授業では、演習のグループワークでつまづいている班に先生がいていねいに教えている間に、先生が「わかった人、他の人に教えて」と言うと、解けた生徒が一斉に立ち上がって、考え中の生徒のところに駆け寄り教え始めた。



当然増える。そこに教員間の温度差という課題も表出した。「導入から1年たった今年の5月の研修で、ALと学力向上との相関に対する疑問や、授業スタイルの変化への抵抗感など、基本的な不満が出ました。ALの有効性については昨年、講師の方々に十分に語っていたので、たつもりでしたが、初めからスムーズに進められません。ALの授業に不安があると、同じ内容を講義で繰り返ししてしまうこともあります。ALが有効か否かはさまざまな研究で実証済み。なので、それを有効にできる組織になれるかどうかが重要です」(家村先生)

生徒側がAL型の授業に慣れていないうちは、話し合えと言っても板書を写しているうちに話し合いが時間切れになることもあった。時間短縮のために、事前にプリントを用意したり、マグネットシート、ICT機器等の活用で効率化を図っている。

「ICT機器を整備し、研修会などで使い方の説明も行って、ツールの存在と有効性も周知しています。生徒の能動的な時間を増やすためには、これらを使いこなす教員側のスキルアップも必要です」(家村先生)

また、生徒側にも課題はある。「グループワークにどうしても馴染めない生徒がわずかながらいます。本来孤立するタイプでない生徒でも、授業中に人と話すことを嫌がる場合があります。こうした生徒の巻き込み方を検討中です」(家村先生)

「グループワークでは組み合わせも大事。キャリア教育の観点からは人間関係がない間柄でも話し合える力が必要です。それを生徒にどう理解させるかが、今後の課題です」(小島先生)

課題とどう向き合うか、同校の今後、引き続き注目していきたい。

教員はとかく教えたがりなので、ヒントを与えすぎないように心がけています」

ALが有効な組織に向けて GWが苦手な生徒も課題

先生たちの実感では、この1年で生徒の学びに対する能動性が高まり、積極的に発言することで、授業への理解も深まっているようだ。

「目の輝きが違ったり、生徒の意欲は目に見えて上がり、やる気のない態度の生徒は激減しています。グループワ

ークから講義形式に戻ると寝ようとする生徒もいますが(笑)。授業で「これについて誰か調べてきて」と言えば必ず調べてくる生徒がいますし、生徒同士が教え合う姿勢も定着してきています」(小島先生)

ALの効果についての数値的な測定は、今年度の終わりに複数の民間業者テストなどを取り入れて、統合的な検証を行う予定だという。

一方で、ALを全校で導入すること、新たなスタイルの授業の進行や事前準備などのため先生たちの負担は

前準備などのため先生たちの負担は